KOBUNSHA

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙にはご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九
光文社
神吉晴夫

長編推理小説　廃虚の唇

昭和38年6月20日　初版発行
昭和38年7月10日　14版発行　　検印廃止　¥350

著者　黒岩重吾（くろいわじゅうご）
大阪府堺市霞ヶ丘町3

発行者　神吉晴夫

印刷者　盛英信
東京都文京区関口町140
慶昌堂印刷

発行所　東京都文京区音羽町3　株式会社　光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（関川製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Zyûgo Kuroiwa 1963

長編推理小説

廃虚の唇

黒岩重吾

カッパ・ノベルス

目次

乗っ取られた…五
拒絶された会見…一三
脂の誘惑…三
帰らない出張…三〇
賭けの勝敗…三七
夜が逃げた…四五
夜ふけの疾走…五三
縊死…六一
御陵の語らい…六九
二千万円の秘密…七七
有馬への道…八四
二つの顔…九三
山の価値…一〇一
黒い自動車…一〇八
消えた女…一一六
告白の前…一二四
背信の声…一三二
奇妙な声…一四〇
華やかな傷…一四八
小さな店…一五六
相場が告げる…一六四
老いの若さ…一七二
ぬれた顔…一八〇
沼の眼…一八八
詐欺と脅迫…一九七
社長の誘い…二〇四
肌のうずき…二一二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蟻の巣…二九
夜と女の貌…三七
過去の亡霊…三五
蝙蝠の街…二三
現われた新薬…二五
コリーのいる小屋…二六
古い洞穴…二六
幻の物資…二四
雄犬の眼…二八
作為と炎…二九
太古の亀裂…二八
取引き停止…三〇
闇を裂く声…三四
落魄者の群れ…三二
裸になる時…三九
第三の男…三七
傷の復讐…三五
黒い落花…三三
白い新生…三〇
地方ボスの秘密…三九
預けられた…三七
女ではない…三五
三十億円…三二
ある別離…四〇
髄まで…四八
十五年前の殺人…四六
大博打…四四
ソロモンの宝…四三
昼の祝杯、闇の哄笑…四〇

写真構成・島内英佑

乗っ取られた

一

泉製薬は、阪和線の仁徳御陵前の駅を降りて、西南方四百メートルほどのところにあった。

かつては古墳群に包まれた静かな場所であった。が、今は古墳は掘り起こされ、団地造りにいそがしい。

製薬会社といっても、女子作業員十七八人程度の小さな会社であった。主製品はアンプル入りの疲労回復液、痔の挿入薬、その他ビタミン類などであった。

もちろん、販売するのは泉製薬ではなく、大阪道修町の丸木製薬であった。

丸木製薬は資本金三億、かなり名のとおった会社であった。

泉製薬社長、泉田敬は菜葉服で、小さな工場内を見回っていた。まだ三十二歳だが、背が高くごつい身体で、浅黒い、唇の大きな顔は三十七八に見られた。

泉田の眼は女子作業員の高橋久子にとまった。三月ほど前にはいった女である。女子作業員募集の広告で応募して来たが、泉田は面接の時から気になっていた。

色の黒い陰気な女だが、眼鼻立ちは整っている。とくに泉田が気になったのは、話す時に伏し眼になる翳りであった。たんにおどおどしているというだけでなく、なにか暗い重荷を背負っているようだった。

女子作業員たちは、すべて新制中学出身で、化粧、男、テレビ、映画にしか興味がない連中であった。年もそうである。

高橋久子の履歴書では、やはり新制中学卒だが、久子にはほかの女子作業員とは違った、なにかがあった。

彼女は、子ども時代失踪した父を求めて大阪にやってきたのである。

久子は、ガラス窓越しに、泉田が見ているのに気がつかないのか、包装の手を休め、青っぽい挿入薬をぼんやり眺めている。と、久子の首がふっとさがり、はっとしたようにあがった。

居眠りしているらしい。泉田は作業室にはいった。私

語していた連中も、真剣に手を動かし始めた。
久子は、まだ気がつかない。泉田は久子の肩に手を置いた。痩せた身体である。
久子は驚いたように泉田を見た。眼が充血している。
夜遊びをするような女ではないのだが。
「すみません」
と久子は低い声で言った。女たちの白い眼が久子にそそがれた。どうやら久子は、ほかの女たちと仲良くないようであった。
「月末までに完納したら、賞与を出すよ」
と泉田は、女子作業員たちに言った。
「わあ、うれし……」
ひょうきんな富岡勢子が叫んだ。室内は明かるい笑いに包まれ、緑の精気を含んだ微風が流れこんだようであった。
泉田は事務室に戻った。事務室といっても、居るのは計理係りの女子事務員と、薬剤師の服部だけである。ほかに二人の営業マンが居るが、外に出ている。
「社長、こう疲労回復薬がふえたら、いつまでも、こいつにばかり頼っているわけにはいきませんな……」
と服部が言った。服部は二十八歳になる。薬大在学中ぐれた時、泉田と知り合ったのだ。
それ以来、泉田を信用し、今では泉田の二の腕となり、共に人生を歩む決心をしている。
数年前、服部と知り合った時、泉田もミナミでぐれていたのである。
泉田が足を洗ったのは重大な理由があったのだが、製薬会社を始めたのは、やはり服部と組んだためであった。
いま一つは丸木製薬の松崎営業部長の知遇を得たことだ。ぐれただけあって、泉田は多感であった。でも最近は三十二歳という年もあって、その多感さを、事業への情熱に変えている。
「どうですか、今やっている咳どめ煙草は？　ぼくは絶対受けると思いますがね、うかうかしていると、大会社がかならずやりますよ」
服部が言っている咳どめ煙草というのは、煙草の葉のかわりに、安息香酸、塩化アンモニウムなどの鎮咳薬を、煙草の葉のようにし、紙で巻き、フィルターもつけて、咳や啖がひどい時、火をつけて煙草がわりに吸う薬であった。風邪をひいていても、煙草のみは煙草を吸いたい

ものである。その代用と、薬を兼ねた、というのが、服部のねらいであった。
煙草のみの心理は、とにかく火をつけたものを吸うことに楽しみがある。
だから服部は、貧弱な実験室でいろいろ研究し、火をつけて吸って、効果のあるものを完成した、というのだ。
泉田は思い出したように、ハイライトを口にくわえて、火をつけた。
「この前も、ちょっと、松崎さんに話したんだがな、丸木のほうが、今はたいへんだろう、落ち着くまで、もう少し待ってくれ、ということなんだ」
「残念ですなあ、でも丸木製薬とあろうものが、むざむざと乗っ取られるなんて、地下の丸木伝右衛門さんも、不肖息子には泣いているでしょう」
「泣いているのは、伝右衛門だけではないよ。今度の社長入れかえで、何十人という社員が泣いているんだ。まだ泣いていないやつは、戦々恐々としている。いつ、どこに飛ばされるか、わからないんだからね」
「でも、松崎さんにとっては悪い出来事でもないでしょう、前社長と仲が悪かったのは有名ですからね。新社長に乗りこんだ角沼さんも、そのことは知ってるはずですし、その点、松崎さんを腹心にするんじゃないですか？」
「ぼくも、そう思うがね。とにかく、早く社内が一新されて、ごたごたがおさまらなければ、こっちもたいへんだよ」
と泉田は言って、なんとなく眉をひそめた。

二

電話のベルが鳴った。女子事務員が聞いていたが、受話器を泉田に差し出した。
「丸木製薬さんからです」
泉田は持って耳に当てた。今話していた松崎営業部長の太い声がした。
「どうだ、今晩？」と松崎は言った。
「はあ、ぼくのほうはけっこうですが」
松崎はあまりしゃべらない。どんな時でもそうだ。これで、よく営業部長が勤まるな、と感心するほどであった。前社長、丸木清と仲が悪かったにもかかわらず、丸木が松崎を手放さなかったのは、松崎が有能だったからだ。

「それじゃ六時半に本町の玉串で会おう」
と松崎は言った。泉田は松崎とときどき飲みに行くことがある。普通なら泉田が接待すべきだが、松崎のほうが払う場合が多い。
「つまらん金をつかう余裕があれば、会社を大きくすることにまわせ」
と松崎は、泉田によく言った。松崎は、泉田を丸木製薬の下請けメーカーの社長としてより、子分のように扱っていたのだ。
「社長、松崎さんに会ったら、ぜひ煙草薬の件をお願いしますよ」
と服部は、泉田が社を出る時、念を押すのを忘れなかった。
丸木製薬の乗っ取り事件は、この春の北浜の大きな話題であった。資本三億、株数は六百万株である。T薬品、F製薬など、たえずはなばなしく新薬を売り出し、大きくのし上がったのに対し、丸木製薬は前社長丸木清の消極策のために、新薬競争に乗り遅れ、ここ数年業績はさっぱりであった。
それでも、一昨年ごろから松崎の強引と思われる進言で、研究陣も広げ、遅ればせながら新薬競争に乗り出そうとした。
そのやさき、買占め魔と噂のある非会員の株屋角沼証券社長、角沼満次に過半数である三百万株を買い占められたのである。
角沼は、中小会社の株をつりあげ、高値で会社側に売り渡す、さやかせぎの買占め魔として悪名をとどろかせていた。
四十に満たない坊っちゃん社長の丸木清は角沼を甘く見すぎた。彼は、角沼がまさか、丸木製薬の経営権をねらっていたとは、思わなかったのだ。
額面割れの株が百五十円になった時、丸木前社長は持株を五十万株も手放した。買占めが表面化し株価が二百円を越した時、あわてて防戦買いに出たが、すでにおそかったのだ。
激しい裁判合戦の後、丸木はついに社長の椅子を角沼に渡さねばならなくなったのだ。
角沼は社長に就任すると、驚くほど厳しい人事異動を行なった。
「丸木製薬が一人取り残されたのは、諸君がそれぞれの

仕事に慣れ、闘志をなくしたためである。私は全社員の職場を移動し、丸木製薬をまったく新しい会社に建て直したい」

それが角沼社長の就任挨拶であった。事実、それ以後の異動旋風は、ものすごい。

部長クラスで、課長に格下げはざらだし、課長級は平社員に落とされるものが続出した。

ことに、総務課長は発送係長に飛ばされ、社をやめてしまった。発送係長になれば、場合によっては、若い社員とともに、薬をトラックに積み込まねばならない。

やめろ、ということと同じであった。

でも、今のところ異動は、役付きの者ばかりに限られ、平社員にまで及んでいない。

部長クラスで異動がないのは、松崎営業部長と酒井仕入れ部長だけであった。

玉串は、御堂筋の本町を西にはいったところにある。有名な料亭ではないが、松崎はよくここを使った。

十一月末の六時半といえば、すでに夜の気配が濃い。御堂筋は自動車のヘッドライトが交錯し、ビルの窓には残業の灯がついていた。

銀杏の葉は黄ばみ、散るまぎわの美をヘッドライトの光芒に鮮かに輝かせ、光がすぎると闇の中に青白く溶け込んでいく。

銀杏のはかなさも、人間の苦しみも、所詮は同じである。でも冬が来れば、銀杏は天命にその身をまかさねばならないが、人間は努力しだいで切り抜けられるのだ。

泉田は、バーバリのレインコートの襟を立て、夜の御堂筋をゆっくり歩き、暗いビルの下を通り、玉串の戸をあけた。

下はカウンターとテーブルがならび、一品料理で飲めるようになっている。

すでに四五人の客が、カウンターに向かっていた。

「お久しぶりですなあ、部長さん、もう来てはりますよ」

太った女中の千代が、泉田を二階の一間に案内した。

松崎は壁ぎわに置いた座蒲団にあぐらをかき、壁にもたれて煙草を吸っていた。

「どうもおそくなりまして……」

と泉田は畳に手をついて、頭を下げた。泉田にとって松崎は恩人である。彼はどんなことがあってもそれを忘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れないつもりでいた。
「いや、ぼくが早く来すぎたんだ。じゃ、さっそく始めようか、千代ちゃん頼むぜ」
松崎はいきいきしていた。なにか、良いことがありそうだな、と泉田は思った。
松崎は、泉田に負けないぐらい身体がごつい。もう五十前のはずだが、いくぶんか脂肪はついたというものの、まだしまった身体をしている。
酒肴が運ばれ、身体が暖まると、泉田もしだいに気分がほぐれてきた。
「異動旋風は、まだ当分続きそうですか？」
「いや、だいたい、これで終わりじゃないかな。全社員を異動するなんてことは、無理だよ。社長にしてみても、うるさいのは、昔からいる幹部連中だし、こいつらをかたづければ、目的はたっしたんじゃないかな。別に、社員たちを動かして、反感を買う必要はないだろう。その点は賢いよ」
「松崎さんは、別にお変わりは」
と泉田は言い澱んだ。もっとも気になっていたことだ。
「おれか、おれは前社長のやり方を非難し、たてついていたほうだからね。今の社長の覚えがめでたくても、ふしぎはないだろう」
と松崎は言って愉快そうに笑った。確かに今日の松崎は機嫌がよかった。泉田はなんとなく、心にひっかかるものを覚えた。
が、それがどこからきているかは、彼にはわからなかった。
「松崎さん、この間ちょっとお話ししました、咳どめ煙草の件ですが、うまくいったら販売していただけるでしょうか？」
「うん、あれはなかなかおもしろい思いつきだよ。ただ味がどうかなあ、まあやってみたまえ。そうそう、ぼくは一週間ほど出張するがね、帰って来たら、いろいろ相談に応じよう……」
「へえ、どこへ出張ですか？」
「いや、こいつはきみにも内証だ、いずれわかることだがね。泉田君、まあ一杯いこう。丸木製薬も、近々社名を改め、一流製薬会社に向かって前進するぜ」
と松崎は元気よく言って、銚子を取り上げた。
まるで、松崎は、ずっと前から、角沼の味方のようで

あった。泉田はさっき疑惑を覚えた原因を悟った。あれは、疑惑ではなく、不安であったのだ。松崎は、角沼に信頼されていると、完全に信じこんでいるようだが、だいじょうぶなのだろうか。

泉田は、白昼強盗のように会社を乗っ取った角沼満次という男を、信用する気にはなれなかった。

「泉田君、今日はきみに会わせたい人がいるんだ。そろそろ出ようか」

と言って、松崎はうまそうに、杯を口に運んだ。

三

二人は、八時すぎに玉串を出た。御堂筋でタクシーを拾い、ついたのは曽根崎新地であった。このあたりは、東京の銀座裏のように、一流のバーが集まっている。

松崎がはいった店は、バー「千子」であった。マダムの千子と女の子が五六人の小さな店だが、松崎のなじみのバーであった。

「ねえ、部長さん、私、お願いがあるのよ」

「ふん、すばらしい精力剤でもつくってくれ、と言うのだろう？」

「冗談じゃないわ。その反対よ、なやましくなる時、押さえる薬をほしいのよ」

「うまいこと言ってやがる、押さえるには男が一番じゃないか、マダムは不自由していないはずだぜ」

千子は、憎らしげに、泉田を見た。

「どう、この言い方。でもね、女というものは、松崎さんが考えているほど、ふしだらなものじゃないわ。そりゃ近ごろの若い女は、見境もなく遊ぶけど、私のような戦前派はだめよ。それでもね、これでも一時は亭主を持ったこともあるのだし、夜、一人で寝ていると、たまらない時があるわ。そんな時、押さえる薬がほしいのよ」

泉田は、にやにや笑った。

「松崎さん、マダムはあなたをくどいているのですよ」

「まあひどい、泉田さん、覚えてらっしゃい」

千子は、泉田の背を強く打った。松崎は楽しそうに笑った。泉田は松崎の女関係が、どんなものか知らない。家には上品なおとなしい細君と、二人の子どもがいる。製薬会社の営業部長であるから、あちこちのバーで顔が広い。

男らしい点も、女が好きそうであった。おそらく関係

のある女も、一人や二人ではないだろうが、松崎は、そんな点は決して他人に推測の余地を与えなかった。
ときどき、交際していて、泉田は松崎という人間がわからなくなる時がある。あけすけでいて、その中にもう一枚、何かをかくしているような気がして、しかたないことがあるのだ。
それは、松崎が、かんじんなことは、どんなに酔っていても、しゃべらないことにもよる。そして松崎と知り合った時の、ふしぎな印象も原因の一つであった。
「マダム、心配するな、近々うちで、ちょうどそんな鎮静剤を発売する。なあ泉田君……」
おそらく、咳どめ煙草のことだろう。
「はあ……」と泉田は苦笑した。
「ほんとなの……」
「ほんとうだよ。ただし、それはマダムのたいせつなところに入れて貰わなければならないがね……」
「いやらしい、人をからかって……」
千子は、眉をしかめると、ちょうどはいって来た客を見、「いらっしゃいませ……」と立ち上がった。
松崎は、ふときまじめな顔になると腕時計を見た。
「ちょっと、電話をかけてみるから……まだ来ていないと思うが……」
と松崎はひとりごとのように言った。
「部長、ぼくがかけましょうか？」
「いや、いいんだ、いいんだ」
松崎はカウンターの電話のほうに歩いて行った。女給の民子が泉田のそばにすわった。
「ねえ泉田さん、飲みなさいよ。いつも澄ましているわね」
民子は二十二三か、髪を長く伸ばし、眼に墨を塗っている。しゃがれ声でちょっと崩れた魅力があった。昔、泉田はふしぎに、このようなタイプの女にもてた。
松崎が、せかせかと戻って来た。
「泉田君出よう、もうすぐ来るらしい。ぜひきみが一度会っておく必要のある人なんだ」
松崎の口調は真剣だった。どうやら松崎は、その人物に、泉田を紹介するため、彼を呼び出したらしかった。

拒絶された会見

一

松崎が、これほどおれを紹介したがっている人間は、どんな人物なのだろう。これまで、松崎は仕事のうえでいろいろな人間を、泉田に紹介した。それは確かに、泉田にとっては、ひじょうに役に立った人物ばかりであった。

ときどき泉田は、松崎がなぜこれほどまで、自分を引き立ててくれるのか、理解に苦しむことがあった。

タクシーのルームライトは消えていた。松崎は無言であった。どんな表情か泉田にはわからない。でも、バー「千子」で、マダムに冗談を言っていた顔と、別人の顔があることは、まちがいなかった。

泉田が松崎と知り合ったのは、ちょうど五年前であった。

彼は暴力団D組の足を洗い、情婦の一人にバーを経営させていた。でも不景気で、尋常のバーでは食っていけない。しかたなく、暴力バーじみたものにした。

ちらしを持たせた客引きを、千日前に立たせ、おのぼりの客を引っぱりこむのだ。

「旦那さん、新規開店の店です。ビール付出しサービス料共で三百円、今夜だけの大サービス、女の子も客をつかもうと思って、大サービスでっせ」

客引きはこんなふうに言い、かもを連れて来る。女給が群がりよって、客にキャンディワインを注文する。甘いカクテルだ。焼酎にポートワインとレモン汁をたらしたやつであった。

原価二十円のものが、一杯五百円、結局、客は数千円、払わされるはめになる。

ある夜、泉田がそのバーの二階の狭い部屋で寝転びながら、なすこともなく、ウイスキーをなめていると、階下でバーテンの江村が啖呵を切る声が聞こえてきた。客が金を払わないと言い、江村がおどしているのだ。三人に一人は、ごてる客がいる。そんな時、泉田は階段を降り、のっそり上がり口に立つことにしていた。たいてい

の客はそれだけで口を閉じた。
その時も、泉田は階段を降りた。その客が松崎だったのだ。
松崎はにやにや笑っていた。その顔を一眼見て、泉田は、この男はただ者でない、と思った。影の地帯の人間に、ぴんとくる薄気味悪い牙が、松崎の顔の中にあった。
もちろん、泉田がそんなものを松崎に感じたのはその時だけで、あとはやはり製薬会社の営業部長であった。
「良い商売だな、焼酎三杯とビール一本で七千円とは」
と松崎は江村と泉田を見つめながら言った。松崎の連れの客は真っ青になってふるえている。
江村は、泉田を得ていきりたった。
「野郎、なめやがって……」
江村は椅子にすわったままの、松崎の胸ぐらをつかんだ。江村はボクサーくずれであった。
が、悲鳴をあげたのは、江村であった。あっというまに腕を捻じ上げられ床にはいながら、あわれにうめいていた。
「きみが経営者か、この男の腕を折って、警察に突き出してやろうか」
「放してやってください、勘定をまちがったのです」
と泉田は静かに言った。ことを起こしたくない相手だ、ということが、泉田には、はっきりわかったのだ。
松崎は、相変わらず微笑を浮かべていた。
「ぼくは製薬会社の者だよ。この赤いカクテルを社に持って帰って分析してみたいな」
松崎が江村の手を放すと、江村は飛びかかろうとした。「やめろ」と泉田は叫んだ。
「ここが、普通のバーでないことは、お客さんごぞんじなんでしょう。どうして来たんですか？」
泉田はマダムに、本物のウイスキーを出すように言って、松崎に尋ねた。
「鬱陶しいことがあって、妙に暴れてみたくなったんだよ。でもこいつは失敗だったな」
と松崎は答えた。それ以来、松崎は一人でときどき飲みに来るようになり、泉田と仲良くなったのだ。
泉田は過去を話した。
泉田が、大学出なのを知ると、いつまでこんなことを続けるつもりだ、と尋ねた。
泉田は、立派な仕事をしたいが、どうしてよいかわか

らない、と言った。松崎は、二三百万の資金があるなら、製薬会社をやればよい、と言ったのだ。
泉田は、薬というものが、そんな程度の資金で、素人でも簡単にできるものとは知らなかった。
「良い薬剤師さえ、つかめばな」
と松崎は、製薬業界の内容をくわしく説明した。町工場のようなものでも、アイデア一つで、大製薬会社がどしどし販売してくれる、ということも知ったのだ。
泉田は薬大を首になりかけていた服部に話して、二人で新しい人生を歩むことを決めたのであった。
松崎は、泉田に、自分の過去のことをなに一つしゃべらなかった。彼がどうして、武術を身につけたかも……
ただ、松崎が、たんたんとしたサラリーマンの道を歩んだものでないことだけは、泉田にも想像がついた。
自動車が止まった場所は、梅新の交差点を東に行ったところであった。松崎は電車道を横切り、Uビルの横の暗い道を歩いていった。
このあたりもバーが多い。曽根崎新地のように華やかでも派手でもなく、小さな、もの静かな構えのバーが多かった。
松崎は、黄色い字で、「はな」と書かれたバーの前で立ち止まった。

二

「ここで待っていてくれたまえ。きみを紹介することは、その人にまだ言っていないんだ……」
「はあ」
と泉田は答えた。松崎が中にはいったので、彼は、バーの前をなんとなく歩いた。ときどき電車道から、夜の風が吹きつけて来る。泉田は煙草を吸おうと、ライターをつけたが、だめであった。
顔を上げた時、泉田は一人の女がこちらに向かって歩いて来るのを見た。黒っぽいようなコートを着ている。が、闇の中にぱっと浮き出た、その女の白い顔が泉田には、どきっとするほど美しく思えた。
すごい美人というのではない。が、その白さが匂う顔には、おぼろな闇を切り裂くような色気があった。三十五六か。
女は、泉田を警戒するように、道の端によった。眼が細く、眉も薄いようだ。少しアンバランスな顔のなかか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com